

氏 名 野 間 正 二
 学位(専攻分野) 博 士 (文 学)
 学 位 記 番 号 論 文 博 第 374 号
 学位授与の日付 平成 12 年 1 月 24 日
 学位授与の要件 学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
 学位論文題目 読みの快楽

——メルヴィルの全短編を読む——

論文調査委員 (主 査) 教 授 中 村 絃 一 助 教 授 若 島 正 助 教 授 佐 々 木 徹

論 文 内 容 の 要 旨

ハーマン・メルヴィル (Herman Melville) (1819 - 1891) は、19 世紀アメリカにおける最大の作家だと言われている。その高い評価は『白鯨』(Moby-Dick) (1851) や『ピエール』(Pierre) (1852) や『信用詐欺師』(The Confidence-Man) (1857) などの長編に負っているところが大きい。ところがメルヴィルは短編小説家としての一面も持っている。その面は本国でも日本でもあまり注目されてこなかった。

そこで本論文は、全ての短編 15 編を主に語り口から分析検討することで、新たにメルヴィルを短編小説家としても再評価しようとするものである。作品を検討する順序は、発表時期や創作時期ではなく作品内容によっている。本論文では、短編 1 作品に 1 節を設けて検討しているが、15 の作品を内容や特質の共通性を考慮して 6 グループに分け、それぞれに章を立てタイトル「住む」「暮らす」「隠す」「欺く」「生きる」「演じる」をつけて論じた。

第 1 章では「ピアザ」(“The Piazza”)と「魔の島々」(“The Encantades”)とについて、当時流行していたピクチャレスクな風景の愛好との関連から検討した。まず「ピアザ」では、この作品がアーヴィング (Washington Irving) のピクチャレスクを解説紹介したエッセイ「キャッツキル山脈」に大きな影響を受けていることを示唆した。次に主人公の語り手は風景を眺めることの限界を自覚し、当時の風景愛好家達を批判する眼差しを備えていることを、語り口の分析を通して証明した。ところがその一方で語り手は、マリアンナという娘との出会いから眺めるという行為の限界を知りながらもそれを受け入れざるを得ないことを教えられる。そういう語り手の内面の変化を読者は読み取るようにこの作品の趣向は凝らされている。

「魔の島々」つまりガラパゴス諸島は、ピクチャレスクな風景に満ちていたから、語り手もピクチャレスクの愛好家として、単純に 10 枚のスケッチを語っているかのように思われる。しかし語り手は、ニューヨークに住み平凡な日常を過ごしている現実を忘れてはいないし、さらに世界を絵として眺めることの非人間性を指摘し、実際のスケッチでは神と無関係な自然を描いていることから、ピクチャレスクなものを見方を批判する特異な愛好家であることが明らかになってくる。そのことを、この短編中で最もよく言及されるスケッチ「ノーフォーク島と混血の寡婦」を分析して具体的に証明した。

第 2 章では家庭内の様子を一家の主人である語り手が語る「リンゴ材のテーブル」(“The Apple-Tree Table”)と「私と私の煙突」(“I and My Chimney”)とについて考えた。「リンゴ材のテーブル」は、リンゴ材のテーブルから虫が出てきたという当時良く知られていた話題とスピリット・ラッピングを含む降霊術の流行とを題材にしている。だからそれらを如何に語るかという語り口が問題となる。語り手は自分の経験を語る際、自分をも笑いの対象にして聞く人を笑わせようとする。この態度は、精霊の存在に対して確固たる態度のとれない自分の姿を笑うべき滑稽な姿として意識していることから生じている。語り手は、自分の確信の無さを笑いとともに受け入れることを願っている。この語り手の姿を通して、メルヴィルは確信が持てず右往左往している人間が家族とともに暮らす時の滑稽な有様を描いた。

「私と私の煙突」では自宅の中心を占めている巨大な煙突をめぐる、その古い不便な煙突を取り壊すとする妻とそうはさせまいとする語り手との攻防が描かれている。家庭内の葛藤は、普通はあまり赤裸々には語りたくないものだが、この語り

手は技巧的な語り口を用いてそれを告白している。その語り口とは笑いを誘い、家庭内の些細な出来事を別の象徴的な解釈に読者を誘うものである。ただしその背後には、語り手が希望や理想の挫折を経験し、ある種の無常観を持ち隠棲的な生活を望んでいることが読み取れる。それゆえこの語り手は、進取の気性に富み若々しい妻の言動に困惑し抵抗しつつも、日々の生活をそれなりに楽しく暮らしている様子を自己中心的立場から語っていることになる。

第3章では「貧者のプディングと富者の食べ残し」(“Poor Man's Pudding and Rich Man's Crumbs”)と「独身男たちの楽園と乙女たちの地獄」(“The Paradise of Bachelors and the Tartarus of Maids”)と「二つの教会」(“The Two Temples”)の3作品を検討した。これらの作品は、1つの短編がさらに短い2つの小品からなるいわゆる二つ折り書板という独特の体裁をとっている。

「貧者のプディングと富者の食べ残し」の場合、前者の小品では貧しいが高貴な米国の農民の姿が、後者ではチャリティに群がる飢えた動物のようなロンドンの浮浪者の姿が対照的に描かれている。だから英国を否定的に捉え米国を肯定的に捉えた作品と考えられがちであるが、米国の現状にも批判的な目が向けられている。しかしこの作品では、作者のそのような批判的な視線を読み取ることもよりも、むしろ相手の厚意に甘えている自分の立場を意識するがゆえに、自分の考えを率直明快に主張できず、逡巡したり沈黙したり皮肉ったり茶化したりすることによって婉曲的にしか語れない語り手の語り口と心の動きを読み取り味わうことが重要である。

「独身男たちの楽園と乙女たちの地獄」を構成する対照的な2つの小品はともにメルヴィルの経験がもとになっている。とりわけ前者の小品は、ロンドンでのメルヴィルの体験がほぼそのまま利用されているから、気楽なエッセイに過ぎないなどと過小に評価されてきた。しかしこの小品は、語り手の複雑な心の内が読み取れることから、評価の高い後半の小品とじゅうぶん拮抗し得る内容と完成度を備えた作品であると言える。そしてこの短編は二つ折り書板という特殊な構造を持っているから、対照を際立たせるための技巧にすぎない語り口にナイーブに意味を読み込むべきではなく、また一方の作品だけでは曖昧だった意味を両者の対照的な構造の中で明白にすべきことを具体的に指摘した。

「二つの教会」は、ニューヨークの特権的教会での語り手の屈辱的な経験を語る小品と、ロンドンの劇場での心温まる経験を語る小品からなっている。語り手は劇場を第2の教会と呼び、劇場には教会にない本物のチャリティがあると断言する。だからこの作品は豪華な特権的教会を批判しているとこれまで解されてきた。ところがこの作品が英国の脚本家ノウルズに献呈されていることや英国人俳優マクレディを語る時の共感的な語り口やアスター・ブレイスの騒乱に注目し、そしてこの作品の特殊な形式が生み出している循環する対応関係を考慮に入れると、この作品がアスター・ブレイスの騒乱で顕在化した偏狭で粗暴な同胞への批判とマクレディに対する語り手の償いの気持ちが込められていることが明らかになる。このような隠された語り手の意図を、明白で平凡な特権的教会批判の背後に読み取ることが、この作品を読む面白さであることを指摘した。

第4章では「鐘塔」(“Bell-Tower”)と「おめでたい失敗」(“The Happy Failure”)について考察した。「鐘塔」は自動人形を完成させたと考えられている機械師バンナドンナが主人公である。巻頭のエピグラフも作品の最後の文章も寓意的であるから、この作品はホーソンの短編「あざ」のようなアレゴリーと解されることが多かった。ところがバンナドンナを、自動人形を完成したかもしれない人びとに思わせるために命を賭けて演じきった人間であると解すれば、この作品は作者が表面しか読まない読者を信頼できない語り手を巧みに利用することによって欺こうとした複雑巧妙な作品になる。

「おめでたい失敗」も演じることで世間を欺こうとした伯父が主人公である。伯父もバンナドンナと同じく夢のような発明に熱中するが、しかし彼はその失敗を潔く認める。そして失敗を契機にして「いい老人になれた」姿を演じ続けた。語り手はその伯父の演技に気づきそれを理解し祝福する気持ちから、この伯父の姿を「おめでたい失敗」というタイトルで語り、物語の最後では、臨終の時に伯父が「失敗を与えて下さった神様に感謝を!」と言ったような気がしたと語ることで、伯父のそれまでの演技を完璧なものにしてやる。一見すれば単純なこの物語は、これまでほとんど無視されてきたが、しかし語り手である甥のこのような心の動きに焦点を当てて読めば、しみじみとした味わいのある佳作であることがわかる。

第5章では「コケコッコー」(“Cock-A-Doodle-Do!”)と「避雷針売りの男」(“The Lightning-Rod Man”)と「バイオリン弾き」(“The Fiddler”)の3作品を検討した。雄鶏の鳴き声をタイトルに持つ「コケコッコー」の語り手は、「悲しい意気消沈」の中で生き続けるエネルギーをかき立てる掻き立てるために、鶏鳴に対して異常な態度をとっているが、それが滑稽で異常な言動であることも自分を奮い立たせるための演技であることも意識している。しかし「意気消沈」の中で、生き

続けるためにはこれ以外の方途を見いだせなかったから、自分の言動を笑いながら受け入れるより仕方がなかった。ゆえにこの作品で大切なことは、語り手の笑いを誘う語り口の背後に、狂気と見られるほどの自己劇化の努力と、それを生みだした絶望的状况の中で生き続けようとする意志とを読み取ることにある。

「避雷針売りの男」は、避雷針を売りに来た男を語り手が最終的には叩き出す話だが、その語り口からアレゴリーと解されることが多かった。だがこの作品は、当時人気のあったジャンルの「セールスマン物語」に属するものであって、まず狡猾なセールスマンと語り手が神話の世界や宗教や信仰に関する言説を巧みに用いることで、相手を具体的なセールスの場から抽象的な議論の場に誘い込み煙に巻き撃退する手法を楽しむべきものである。その上で、その時の語り手の異常に高揚した状態は雷鳴と稲妻を契機にした意識的なものであること、さらに彼の日常は恐らく静かな無力感の中で営まれていたであろうことを推し量りながら読むべきことを提案した。

「バイオリン弾き」では、かつて神童と見なされていた男ホートボーイが語られている。彼を歴史上の神童マスター・ベティとの関連で考えると、詩人志望の若い語り手はホートボーイに元神童の理想的な生き方を見だし大感激しているが、作者メルヴィルはホートボーイを批判的に見ていることが分かる。だからこの作品は、従来考えられてきたような元神童の理想的な生き方や無視された天才の生き方を読み取るべき教訓的な作品ではなく、ホートボーイを手放して賞賛する語り手の軽薄で愚かな言動に注目すべき作品であると言える。

第6章では、豪奢な生活の果てに破産し行方不明になっていたが65歳直前にかつての知人達の前に再び姿を現した男の晩年を描いた「ジミー・ローズ」(“Jimmy Rose”)をまず考察した。従来、彼は耐え難い経験をした後で内面的に成熟し貧困の中で心静かに晩年を送った人物と解されることが多かった。それは、ジミー自身がそういう振る舞いをして、語り手もそう解されるように語っているからだ。しかしジミーの身体が小刻みにふるえている点に注目して精読すると、貧窮の聖人の様な彼の振る舞いの背後には、人間くさい感情や計算があることが明らかになり、そのことを語り手も気づいていて強い印象を受けていたことが分かる。しかし語り手はジミーの演技に気づいていないかのように巧妙に語っている。ジミーは無一物の生活を心静かに受け入れていたとするならば、それは語り手がジミーの親友でありながらも特別な援助をしなかったじゅうぶん口実になるからである。

次に「バートルビ」(“Bartleby, the Scrivener”)を、従来研究の中心であったタイトル人物バートルビではなく、語り手の弁護士から考察した。晩年を迎えた弁護士は、最初は熱心に働いていたがやがて働くのを拒否して最後には獄中で餓死したかつての従業員バートルビの思い出を語っている。弁護士は自分は功利的で物質的だから心の領域のことは疎いので、バートルビは謎であったと最初に明言する。自分にとって謎であったから、聞き手にとってもきっと興味深い話であるにちがいないというわけだ。しかし弁護士がバートルビの話を読んだ理由はそれだけではなく、使用人を結果的に拒絶し餓死させたことに心の傷を負っていて、その心の傷が彼の話を読ませたのだ。弁護士はバートルビのことを語ることで、一度見捨てた男を心の内に再び甦らせて罪滅ぼしをしている。しかし弁護士は自分の負った心の傷をできるだけ隠そうと演技しているから、読者は演技の背後にあるものを読み取る必要がある。

最後に、実録をもとにした「ベニート・セレーノ」(“Benito Cereno”)を実録と比較し、メルヴィルが創作したり変更したりした40箇所を指摘し、そのそれぞれについて目的と効果を検討した。その結果、創作上必要な変更に加えて、メルヴィルは見かけの世界は曖昧で人を欺く世界であることを強調し、その世界での2人の人間の対照的な生き方を描こうとしていることが分かった。デラノーは人を欺く曖昧な世界で演技を続けることによって生き残ろうとし、セレーノはその世界に深く絶望し演技をさらに続けることを拒否することによって死を選んだ。だからメルヴィルのこの作品での関心は、人を欺く曖昧な世界で生きる(演じる)ことにあったと思われる。この作品では、2人の人間は両極端な対応の仕方をしているが、そのどちらの人間にも与することのできない作家メルヴィルの苦悩を思いやることが大切である。

以上の全短編の分析検討から、メルヴィルは生きていくうえでの演技を主なテーマに据え、テーマにふさわしい演技をする語り手や第3章で特に詳しく説明した「間テクニシティ」を巧みに利用してそのテーマを展開していることが明らかになった。従って長編作家として高い評価を得てきたメルヴィルは短編においてもその技法やテーマの展開の面から高く評価されるべき作家であると結論できる。

論文審査の結果の要旨

ハーマン・メルヴィルはアメリカ大学における最も重要な作家の一人である。米国を中心に毎年数冊の研究書が出版され、日本でもすでに20冊を超える研究書が存在する。しかし、全短編に焦点を絞った研究書は米国に4冊、Fogle (1960), Bickley (1969), Fisher (1977), Dillingham (1977) があるのみである。日本では、本論文はメルヴィルの全短編を考察した最初の研究である。また、本論文は次の2点に特徴がある。その第1は、論者は、ディリンハムの著書で示された〈演技する作者〉という視点をさらに展開させ、新たに〈演技する語り手〉という視点を導入して、その視点から一貫して全作品を分析・検討している点である。第2は、論者は、歴史的事実や同時代の文化と作品との関係にも目を配り、数多くの新たな指摘をしている点である。

第1の例として、作品「ジミー・ローズ」の解釈が挙げられる。これまでの多くの批評家はタイトル人物ジミーを中心に分析して、この作品を、豪華な生活の果てに破産した後で精神的に成長し極貧の中でも心静かに晩年を送った人物の物語と解してきた。ところが、ディリンハムは分析の中心をジミーから語り手に移し、その語り手を、「人生の流転を認め人間存在を生と死との両面から眺めよう」とする作者メルヴィルの当時の考え方の代弁者であるという解釈を示した。しかしながら、論者は、語り手を分析の中心にするというディリンハムの手法を受け継ぎながらも、語り手の性格とメルヴィルとの関係ではなく、語り手と作品との関係について、すなわち、作品における語り手の役割と機能について考察する。論者は、まず、ジミーの身体が〈小刻みにふるえて〉いたことに注目して、それをジミーの心静かな心境ではなく実は内面の激しい葛藤の現れ出たものであると解釈する。そして、語り手も、ジミーの無一物の聖者のような振る舞いが実は演技であることに気づいてその演技に感銘を受けているのだが、それを率直に語っていない、すなわち、気づかないふり（やはり、演技）をしているのだと論者は解釈する。その理由は、そうすれば、語り手は親友でありながらジミーに援助の手を差し伸べようとしないう自分を批判する読者の目をかわせると考えたためではないかと論者は推論する。読者に対して〈演技する語り手〉という視点を取り入れることで生まれたこの解釈は、斬新でかつ説得力もある。

第2の例として、「二つの教会」の解釈を挙げることができる。この短編は、一般に、フィッシャーなどが主張するように、アメリカの特権的な教会（あるいはそれが象徴するもの）を批判した作品と解されてきた。しかし、ディリンハムは、この作品においても語り手に焦点を当て、世渡りには演技が必要であるという語り手の心境の変化にはメルヴィルのそれが反映されていると結論づけている。このような研究を背景にして、まず、論者はこの作品の献辞に注目し、それが作品とまったく無関係に思われる脚本家ノウルズになぜ献呈されているのか、その謎を探っていく。その過程で、論者は英国人俳優マクレディと米国人俳優フォレストとの確執、アスター・プレイスの騒乱に対するメルヴィルの関わり方、ノウルズとマクレディの脚本家と俳優という緊密な関係についての同時代的な事実を新たに掘り起こし、また、メルヴィルのロンドン滞在中の日記を精査することによって、作者の経験と作品との微妙な関係を指摘する。次に、論者は〈二つ折り書板〉という作品構造の特徴に注目し、それを詳しく分析し、この短編を構成する2つの小品は対照的であるばかりでなく循環する対応関係にあることも指摘する。こうしておいて、論者は、語り手がアスター・プレイスの騒乱で明らかになったマクレディに対する米国人同胞の粗暴な振る舞いを済まなく思いその償いをしたい気持ちでいながら、米国人読者の反撥をおそれてそれを隠している〈演技する語り手〉であることを証明する。したがって、ノウルズへの献辞も実はマクレディに対するものであり、そのことを隠そうとする語り手の演技の一つであったと論者はその謎を解明する。これらの指摘や証明に見られる、歴史的事実、同時代の出来事、伝記的事実の援用の手際と、作品構造の特殊性を指摘する手続きは論者の独壇場である。また、本論は従来比較的軽視されてきたこの作品の重要性を証明することになっている。

論者はその他の作品においても新たに独自の解釈を施している。とりわけ、「ピアザ」の成立に大きな影響を与えた作品はアーヴィングの「キャッツキル山脈」であろうという指摘や、「おめでたい失敗」において、甥の語り手は夢のような発明に熱中して失敗した後の伯父の晩年の姿を共感をこめて語っているという解釈や、また「ベニート・セレーノ」におけるデラノー船長は登場人物としても演技し、また、時には三人称の語り手と一体となって事件の語り手としても演技しているという見解などは、今後の研究において無視できないものであろう。

このようにして、〈演技する語り手〉という新しい視点からメルヴィルの全短編を意欲的に読み直そうとした論者は、テキストをそのインターテクスチュアリティにも注意を払いながら精読しているだけでなく、これまでの研究の広範な蓄積にも

目配りをして着実に議論を展開している。その論証はおおむね妥当なものであり首肯できる。本論文の学界への貢献は大きいと言える。

ただし、語り手の機能という視点からの読解は、本論文の優れた点でもあるが、同時に弱点となることもある。例えば、「バトルビィ」の中のバトルビィという不可解な人物についてはそれが語り手でないという理由で十分な分析・検討が行われていないという印象は否めない。また、視点を一貫させようとするあまり、時には深読みしすぎて、すべての解釈に同じ方向性を持たせる結果になったことも弱点と言え弱点である。しかし、そうした弱点は本論文が一貫した視点の導入によって全短編の解釈に対して示した新たな知見に較べれば小さな瑕瑾に過ぎない。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。1999年11月19日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格を認めた。